

日本西アジア考古学会 第28回大会 発表要旨

開催日：2023年6月24日（土）～25日（日）

会場：白鷗大学（対面）

口頭発表

エジプト王朝成立とビール

馬場 匡浩

先王朝時代のヒエラコンポリス（Hierakonpolis）遺跡では、エジプト最古の大型ビール醸造施設がみつかっている。それは、エリート墓地に隣接する。通文的にみても、アルコールが地位や権力の維持強化として機能していたことは確かであろう。本発表では、ヒエラコンポリスにみられるビールと権力の関係を考古資料から明らかにし、それを初期国家形成の文脈で考えてみた。

およそ20年の発掘調査により、ナイル川沖積地から2kmほど離れた低位砂漠の涸れ谷内には、エリート墓地、祭祀施設、ビール醸造施設が存在することが明らかとなった。これらは、エリートの権力顕示の儀礼祭祀空間を構成する要素といえる。こうした祭祀空間において欠かせないアイテムがビールであったのだろう。ビール醸造址（Operation B）は、直径1mほどの大型甕を用いた加熱施設が五つ並び、一度の火入れで300Lの麦汁が生産可能である。加熱施設にはビールを入れる粗製壺の焼成窯も併設され、ここはビール生産の大型統合施設といえる。

儀礼祭祀の構成要素の年代は、どれもナカダIC-IIAB期である。ヒエラコンポリスでは、どこよりも早くエリートが生まれ、かれらの地位と権力を維持・拡大させる儀礼祭祀が一つの大きな契機となって、国家形成プロセスは進行したと考えられる。スサを混和した粗製壺は、ヒエラコンポリスにて支配者のためのビール壺として誕生したが、ナカダIIC期までには上エジプト全体に拡散する。加えて、ビール醸造址もナカダやアビドスといった主要な遺跡でみられるようになる。おそらく、ビールを用いた儀礼祭祀や再分配システムが、社会を束ねるツールとして他地域で模倣され、ビールの醸造と壺生産がパッケージとして広がったのであろう。また、ビールが権威のシンボルであることから、壺自体にも価値が付加され、それを副葬する概念も一般化する。この流れは、デルタにも到達する。近年、テル・エル＝ファルカ（Tell el Farkha）とブト（Buto）では、IIC-D期層からビール醸造施設が検出されている。これまで言われてきたナカダ文化流入の実質的な開始と時期を一にする。ヒエラコン

ポリスにはじまるこうした儀礼祭祀の共有が下地となり、後の政治的統合が達成されたと考えられる。

エジプト先・初期王朝時代における 儀礼用容器の様式化プロセス

竹野内 恵太

本発表では、エジプト先・初期王朝時代における主に祭祀遺構から出土した土器と石製容器を対象として、その経時性を辿ることで、王朝時代の伝統化した儀礼用容器への様式化プロセスを再構築することを目的とした。それにより、先王朝～初期王朝時代の文明形成期における儀礼祭祀の展開の一端を論じた。

まず、儀礼用土器の中でも最も代表的なものとして、清めの儀礼で用いられたヘス壺が挙げられる。ヘス壺の系譜を辿った結果、第1王朝以降の様式化したヘス壺は、テル・エル＝ファルカ（Tell el Farkha）遺跡出土のヘス壺がすでに上エジプトの影響下で生成された可能性も排除できないが、IIIB-IIIC1期頃に系譜を異にする上下エジプトのヘス壺の諸特徴の兼備によって生成された可能性がある。いずれにせよIIIB-C1期頃に上下エジプトでヘス壺の諸特徴が共有されていくようになったと考えられる。

テル・エル＝ファルカ（W106・W211）およびヒエラコンポリス（Hierakonpolis）（HK29A）遺跡では、基本的に清めの儀礼と供物奉納で使用されたと考えられる土器と石製容器が神殿址および祭祀遺構から出土しており、ヘス壺や器台など双方で共通性の高い組成を示す。この儀礼用容器セットの全体の系譜を確認したところ、多くが上エジプト地域に由来する土器で構成されていた。現時点で双方の前後関係を確定させることが難しいため断定はできないが、IIIB-C1期頃にかけて、ヒエラコンポリスで儀礼用土器群の選択性が急速に再構成されるとともに下エジプト地域と緩やかに共有化を達成した可能性を指摘した。また、各祭祀遺構からしばしば出土する石製双耳壺を時期別に整理・比較すると、ヒエラコンポリスにおいて実物サイズの双耳壺を何らかの儀礼祭祀のコンテキストの中で用いる習慣がIIC-D～IIIA期頃に生まれ、それがIIIB期以降に下エジプト（特にテル・エル＝ファルカ）でモデル化・小型化したものとして受容された可能性が高い。

以上から、IIIB-C1期における後代の神殿儀礼に続

くような儀礼用容器セットの再編とその北上が看取される。それでは、儀礼用容器が様式化する背景とは何だったのか。テル・エル＝ファルカ東部コム (Kom) 出土の祖先あるいは支配者と考えられる金製の人物像や、ナルメル王のメイスヘッド上の図像に描かれたセド祭の場面におけるヘス壺と器台などを勘案すると、IIIB-C1 期の儀礼用容器を用いた祭祀の目的は、基本的に王族関連の儀式に基づくエリート世界の再生産だった可能性がある。だとすれば、統一王朝開始の直前期、つまり IIIB 期頃にヒエラコンポリス-アビドス (Abydos) の王族儀礼の再編と拡大、デルタにおけるその受容の急速な達成が儀礼用容器の様式化およびその共有の背景として想定できる。ただし、ほかに関連遺構出土容器の整理、共伴資料を含めた祭祀遺構それ自体の性質の考察、年代観の精緻化など、課題として残すところは多い。

エジプト中王国時代における 襟飾りを用いた葬送儀礼の展開

山崎 世理愛

エジプト中王国時代に行われた葬送儀礼の一つとして、図像や実物の装身具を死者に捧げる儀礼が挙げられる。本発表では、その主要品目である襟飾りの種類に着目し、儀礼の展開とその背景を考えた。箱型木棺内側に描かれたオブジェクト・フリーズには、さまざまな器物が図像と文字ラベルで示されている。そこから襟飾りの描写を抽出した結果、88 点の棺で 249 点確認された。これらの図像表現は、襟飾りのビーズ束を固定したターミナルの形状によって、(1) 半円形ターミナル襟飾り、(2) ハヤブサ形ターミナル襟飾り、(3) 古王国時代の伝統を継ぐ半円形ターミナル旧形襟飾り、(4) ロイヤルウセク襟飾りに分けられる。このうち半円形ターミナル襟飾りは地域・時期に関係なく最も頻繁に描かれ、全体の約 73% を占める。一方、他 3 種類には地域性や時期差があり、メンフィス・ファイユーム地域では半円形ターミナル旧形襟飾り、中部エジプト地域ではハヤブサ形ターミナル襟飾りが特徴的であった。中部エジプトで排他的に取り入れられたハヤブサ形ターミナル襟飾りは、多重棺上で半円形ターミナル襟飾りとともに描かれることがあり、この場合ハヤブサ形ターミナル襟飾りだけ内側の棺に表される傾向が看取された。中王国時代後期にオブジェクト・フリーズは姿を消すが、人型棺などには襟飾りが描かれ続ける。中部エジプトでは引き続きハヤブサ形ターミナル襟飾りの描写が見られ、王権を象徴するメネス頭巾の装飾が施された人型木棺にも見られることは特筆される。そしてこの頃には、他地域でもハヤブサ形ターミナル襟飾りが用いられるようになった。メンフィス・ファイユーム地域では、当該地

域に特徴的だった古王国時代の伝統を継ぐ襟飾りではなく、社会的地位の高い被葬者を中心にハヤブサ形ターミナル襟飾りを実物として取り入れる動きが見られた。

死者は再生復活において、冥界の王オシリス神と息子のホルス神の双方と同一視される必要があり、襟飾りは死者を主にオシリス神と同一視する役割を持つと言われてきた。しかし、ハヤブサ形ターミナル襟飾りには「ホルスの襟飾り」という名称が付されることから、ホルス神との同一視とも深く関わったと考えられる。死者と神の同一視という思想は中王国時代後期に強まり、杖や武器など王権の象徴を死者に捧げる儀礼が本格化したことにも反映されている。こうした流れのなかにハヤブサ形ターミナル襟飾りの広まりも位置付けられると言える。中部エジプトでは、とくにオブジェクト・フリーズのなかでいち早く取り入れられ、多重棺の場合は内側の棺つまり被葬者の身体に近い位置に描かれる傾向があった。単なるデザインのちがいはなく、当該地域ではその意味や位置付けも早くから共有していた可能性が考えられる。

後期青銅器時代のエジプトで流通した 外来系黒色磨研土器

—小型片把手壺の生産地に関する再検討—

有村 元春

東地中海周辺地域では紀元前 1600~1400 年頃にかけて、一般的に黒色磨研土器 (Black Lustrous Wheel-made Ware) と呼ばれる土器が広く流通する。中でも小型の片把手壺 (黒色磨研小型片把手壺) はキプロス島・レヴァント地域・エジプトで流通したことが知られている。この土器はキプロス島で生産されているものが多いとされているが、レヴァント地域でも作られていたことがわかっている。

エジプトで出土した黒色磨研小型片把手壺は、近年 J. ヘルブルガー (Hörburger) が集成を行い、全てキプロス島由来だとして提示した。その後、この集成は当時の交易に関する研究でも活用されている。しかし、ヘルブルガーは生産地に関する詳細な議論を行っておらず、全てキプロス島由来だと結論づけるための根拠を示していない。黒色磨研小型片把手壺がキプロス島以外でも生産されていたという事実を考慮すると、エジプトで出土した資料全てをキプロス島製とみなした場合、当時の交易活動の実態を捉え損ねる危険性がある。

こうした課題から、エジプト出土の黒色磨研小型片把手壺の生産地については再検討する必要があると考えた。そこで、本発表ではヘルブルガーが提示した成果の再確認及び近年新たに報告された資料の集成を通して、当時のエジプトとキプロス島間での交易を考え

るうえで、黒色磨研小型片把手壺がどの程度の有用性をもつのか検討した。

その結果、テル・エル＝ラターバ (Tell el-Rataba) などの遺跡においては、エジプト在地の胎土をもつ個体が出土していることがわかった。一方で、詳細な報告がなされていない資料も多く、ほとんどの資料について生産地を特定できないことが確認された。現状では少なくともエジプトで出土している黒色磨研小型片把手壺をすべてキプロス島由来だとみなせず、エジプトとキプロス島間での交易活動の検討に黒色磨研小型片把手壺を用いるには、実物の観察や胎土分析など、さらなる調査が必要とされる。

また、エジプト製の個体は存在しないという見解が、この土器の起源を考えるうえでこれまで重要視されてきたが、実際にはエジプトを含めて広範囲で生産されていた土器であると認識を改めなければならない。そのため、当時の東地中海周辺地域における黒色磨研小型片把手壺の位置付けについても、今後再検討する必要があると考えられる。

エジプト新王国時代のシャフト墓のタイプ分類試論

矢澤 健・吉村 作治

本発表は、ダハシュール (Dahshur) 北遺跡における新王国時代のシャフト墓のタイプ分類と、その通時期的変化に関する試論である。

新王国時代の墓、特に高官墓の多くは、地下の空間が広く設けられ、追葬・再利用に伴う改変や墓どうしの結合が認められる。そのため構造が複雑であり、ほぼ全てが盗掘されているため、墓形状の通時期的変化を捉えることが難しい。これに対して、発表者らが調査するダハシュール北遺跡のシャフト墓群は、少数の例外を除いて比較的シンプルで小型であり、使用された期間も短いと推測される。そのため、墓形状の通時期的変遷を追いやすいという利点がある。

本発表では、ダハシュール北遺跡のシャフト墓の分類案を提示した。墓はまずシャフト (縦穴) 部の平面が南北に長いタイプ (NS) と東西に長いタイプ (EW) に大別された。地下の部屋は掘削された方角によって分類され、西側 (-w)、東側 (-e)、北側 (-n)、南側 (-s) があった。地下の部屋には付属室が造られた例があり、これに関しては掘削方向を問わず + を追記した。例えば、シャフト部が EW で東側に部屋が掘削され、その部屋に付属室がある場合は EW-e+ と表記する。また、地下2階の構成を持つシャフト墓が少数あり、これらは上記の単位の繰り返しとして記述された。例えば、EW-e+ の東側の部屋からさらに地下に続く縦穴 (平面は東西に長い) が掘削され、底から東方向に部屋が造られていたとしたら、EW-e+ (1階) と EW-e (2階) の組み合わせ

になる。

2023年までに発見された43基の墓を対象に分類を実施した。各墓の時期については、墓から発見されたアンフォラを中心とする土器の年代を参考にした。時期を提示することができた墓は24基あった。その結果、第18王朝後期から第19王朝中期にかけては、NSとEWの両方があり、地下の部屋はNSの場合南 (-s) と北 (-n) に限定され、EWでは東 (-e)、西 (-w)、南 (-s) などがあった。一方で第19王朝後期から第20王朝にかけては、EWに限定され、部屋は西側を指向する墓が多く認められた。EW-e,w+のように東側にも部屋が造られた例 (125、15号墓) があるが、この2例は西側の最奥部に石櫛を伴う特別な玄室が設けられており、掘削当初から西側に重点が置かれた配置計画だったことが窺える。地下2階に拡張された墓でも、部屋は基本的に西側に展開しており、東側に拡張するという選択は採られていなかった。したがって、第19王朝後期以降、埋葬室を西側に設けることが理想的と考えられていた可能性が示唆された。

古代エジプトにおけるハリネズミ：その信仰と権能

花坂 智

エジプト中部のアコリス (Akoris) 遺跡南区で、容器の蓋に用いたと推察されるハリネズミの皮が出土した。容器の蓋は粘土製が一般的であり、皮革製は非常に珍しく、ハリネズミの皮製であることが重要であったことが窺われる。

古代の人びとは、力強さや繁殖力など、動物が本来持つ能力や習性に象徴性を見い出していた。ハリネズミは危険を察知すると針を立てて静止、または身体を丸めて防御の姿勢を取る。そこからは「守護」や「護る」といった象徴性が導かれるだろう。アコリス遺跡出土の製品は、ハリネズミの皮を蓋に用いることで、容器の中身を守ることを願ったことが考えられる。それでは、ハリネズミの習性や特徴から導かれる象徴性は、他にどのようなものが考えられるだろうか。

ハリネズミは人里から少し離れた耕作地や半砂漠、あるいは砂漠地帯に生息しており、環境によっては冬眠する場合がある。夜行性であり、夜間に餌を求めて活動し、朝になると巣穴に戻る。これらの点から、夜間の太陽運行のイメージと重ねられ、ひいては復活再生といった象徴性も帯びていた。また、昆虫を主食とするが、ヘビやサソリも捕食し、それらの毒にも耐性がある。防御の姿勢と併せて、守護や厄除け、強い生命力の象徴性が付与されたことが推察される。

古王国時代の墓のレリーフには、砂漠での狩猟場面や墓主への奉納場面にハリネズミが描かれ、また、船首にハリネズミを象った船のレリーフや模型も知られる。中王国時代以降になると、ハリネズミの全身を

模った小像や印章が数多く作られた。エーゲ海・東地中海地域では、ハリネズミ形リュトンなどの容器が人気を博したが、エジプトでその流行がやってくるのは末期王朝時代になってからのことであった。それは、アリュバロスと呼ばれる化粧品や香油を入れる小さな容器であり、エジプトのみならず、地中海全域で流行した。

このようにハリネズミをモチーフとした製品が王朝時代を通じて作られ、それらには上記のような象徴性が付与されていたと考えられる。こうした製品の種類や量は、古代エジプトにおいてハリネズミが身近な生き物であったことを示しているが、これに対して、唯一の例外である、バハレイヤ・オアシス (Bahariya Oasis) の第 26 王朝の墓に見られるアブアセト女神を除き、ハリネズミが神聖視されることはなかった。

「西アジア考古学」の範囲は 高等学校でどのように教えられるか —新しい学習指導要領と教科書より—

南澤 武蔵

高等学校の学習指導要領改訂は平成 30 年告示により、令和 4 年度より施行されている。現行の学習指導要領における歴史科目の大きな改訂は従前の必修科目「世界史 A」と選択科目である「日本史 A」が廃され、新たな必修科目として「歴史総合」が設置された。また「世界史 B」は「世界史探究」へと変更された。

新たな必修科目である歴史総合は、世界史的内容とともに日本史の内容も含めた近現代史の学習を通して、歴史の学び方や見方・考え方を学ぶ科目となっている。従前の世界史 A も近現代史の学習に重点が置かれていたが、近代以前の「内容」が学習指導要領にあり、教科書に章・節が設けられていた。しかし、歴史総合においては学習指導要領上に「内容」として記載がされなくなり、教科書では「巻頭資料」等の形で本編には含めない形がとられた。その影響の一つとして懸念されるのが、西アジア考古学の世界への足掛かりの喪失である。これまでの世界史 A においても扱いは限定的であったが、それでも教科書に「西アジア考古学の範囲」の内容が記載されていた。現在、西アジア考古学においては人手不足や人材育成の必要性が指摘されている。その状況において、高校生が必ず手にする教科書から「西アジア考古学の範囲」が抜けたことは残念だと言える。

もう一つの世界史に関連する科目、世界史探究も探究を通して資質・能力の育成を目指した科目である。従前の世界史 B からは科目の性格として大きく異なり、単位数も減退となっているが、実際に発行された教科書を見る限りでは扱われる内容自体に大幅な改変があったとは言えない。そのため、世界史選択者につ

いては従来通り「西アジア考古学の範囲」も学ぶ。世界史探究は探究を通して資質・能力の育成が掲げられており、多面的・多角的な考察における資料として考古学的な成果の活用が学習指導要領に明記されている。そうした観点から指摘をすれば、授業で「西アジア考古学の範囲」の内容が扱われる際、生徒が多面的・多角的に考察して深く学ぶために、コンテクストをつかまえられる「資料」として研究者の調査・研究の成果が教育現場に直接的に入っていくことが今後一層求められると考える。

これは歴史総合が近現代の歴史を中心に扱う中でも「西アジア考古学の範囲」が関わる可能性も合わせて指摘できる。近現代の歴史的事象の見方・考え方を通した資質・能力の育成をする際に、その事象を多面的・多角的に考察する資料に「西アジア考古学の範囲」が関係してくることはある。積極的に情報発信をしていくことが必要となっていく。

南ヨルダン、Tor Faraj 遺跡における 中部旧石器技術の多様性と理化学年代

門脇 誠二・田村 亨・木田 梨沙子
廣瀬 允人・須賀 永帰・西秋 良宏

トール・ファラジ (Tor Faraj) 遺跡が属するレヴァント地方の中部旧石器時代後期 (およそ 7.5 万～4.8 万年前) は、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスが共存していた可能性があり、人類進化史の研究において重要な場所と時代である。D. O. ヘンリー (Henry) による最初の発掘では、当時の人類が岩陰に居住して残した多数の炉跡や石器、花粉、プラントオパールが分析され、二つの居住面の空間構造や石器技術などに関して詳細に研究された。本発表では、2017～18 年に発表者らが実施したトール・ファラジ遺跡の再発掘 (4 m²) によって発見された新たな石器群、および堆積物の光ルミネッセンス年代について報告した。新たな石器群は、ドナルド・ヘンリーが以前に調査した C 層 (Floor 1) と D2 層上部 (Floor 2) よりも下に位置する D2 層下部と E 層から収集された。E 層の石器分布密度は D2 層下部より高く、C 層や D2 層上部の石器分布密度に相当することが分かった。

E 層の石器群は、C 層～D2 層上部 (Floor 1 と Floor 2) の石器群と同様にルヴァロワ方式による製作技術が主体であるが、ルヴァロワ製品におけるポイントの比率が低い (11%)。それに対し C 層は 25%、D2 層上部は 15% と高い。また、石核作業面の剥離方向は C 層～D2 層上部において単方向が主体 (70～90%) なのに対し、E 層では単方向が 24% に留まり、対方向 (43%) と求心/直行方向 (34%) が主体である。光ルミネッセンス年代測定の結果、C 層下部から 2 点

(62.3±5.7 ka、53.2±3.4 ka)、D層上部から1点(57.2±3.5 ka)、D層下部から1点(63.9±5.7 ka)、E層から3点(56.1±3.6 ka、65.9±4.2 ka、65.0±4.2 ka)の年代が得られた。層序と整合的でない年代もあるが、新たに調査されたD2層下部やE層も含めて全ての年代が中部旧石器時代後期の範囲に入る。

結果として、トール・ファラジE層石器群は中部旧石器時代に典型的なタブンB型とは異なり、より古いタブンC型(中部旧石器中期)に類似する特徴を含むが、E層の年代は中部旧石器時代に相当する。この類例としてケバラ(Kebara)洞窟V層の石器群が挙げられるが、トール・ファラジE層石器群とは出現時期が異なる。また、ケバラ洞窟やフンマル(Hummal)遺跡では、ルヴァロワ・ポイントが卓越する石器群の下に、石刃が比較的多い石器群(Kebara XI-XII層とHM-A2)が報告されているが、そうした石器群はトール・ファラジでは見つかっていない。このように、トール・ファラジにおける石器技術の層序変化は、中部旧石器時代後期においてユニークである。類似する可能性がある唯一の事例が、アムッド(Amud)洞窟のB4層からB2層にかけての変化である。

レバント地方の終末期旧石器時代における 貝殻ビーズのネットワーク分析

木元 菜奈子・門脇 誠二

西アジアのレバント地方では、農耕牧畜が発達した新石器時代以降に社会交流やネットワークが複雑化・多様化したと一般に考えられており、新石器時代における社会交流の研究が多く行われてきた。しかし社会交流は、新石器時代の直前である終末期旧石器時代(約2.3~1.2万年前)からすでに発達したことが次第に明らかになってきた。その証拠として、貝殻を素材にした装飾品(ビーズ)が着目されている。しかし、その後の新石器時代における社会ネットワークとの違いを貝製ビーズの利用状況に基づいて比較・考察した研究は稀で、その違いを定量的に検証した例はほとんどない。そこで本研究では、終末期旧石器時代の世界ネットワークの特徴を貝製ビーズの流通に基づいて定量的に検証し、新石器時代のデータとも比較しながら考察を行った。

本研究では、対象時期の中でも特に多くの貝殻資料が報告されている、終末期旧石器時代後期(ナトゥーフリアン、以後Late Epipalとする)と先土器新石器時代B期(PPNB)の2時期に着目する。まず文献調査により、各遺跡で出土した貝殻の種類・頻度データを収集し、科レベルでの貝殻の頻度(貝の分類群構成)を遺跡ごとに算出した。次に、任意の2遺跡間における貝殻の分類群構成の類似性を、ブレイナード・ロビンソン係数と呼ばれる類似度指標(以後BR

値とする)によって定量化した。算出されたBR値に応じて、地図上で遺跡のプロット同士を異なる太さの線で結び、類似度を加味したネットワーク図の作成を行った。

その結果、BR値はLate Epipalの方がPPNBより有意に高い傾向にあることが明らかになった。Late Epipalのネットワーク図では、BR値が高いことを示す太線は異なる地域間でも多く結ばれた一方で、PPNBの場合は太線のほとんどが地中海沿岸地域に集中していた。PPNBで見られるこのような地域性や、いくつかの遺跡での貝殻出土事例を踏まえると、PPNBでのBR値低下は社会ネットワークにおける地域独自性の増加によるものと解釈できる。逆にLate Epipalでは、本分析の結果や細石器の広がりなどを考慮すると、より均質な物質文化を広く共有するネットワークだったと考えられる。Late EpipalからPPNBにかけての貝殻のBR値低下は、生活形態や社会交流の質の変化を示しているかもしれない。

南コーカサス中石器・新石器時代の幾何学形細石器

西秋 良宏

西アジア新石器時代の編年構築においては、打製石器、なかんづく狩猟具たる尖頭器の技術形態の特徴の解析が主要な役割を果たしてきた。打製石器は長期的な文化進化を一貫した視点から追跡できる有用な人工物であること、さらには旧石器時代以来、おこなわれていた狩猟のありようが当時、変化したことなどが、その背景にある。この発表で扱う南コーカサス地方の新石器時代には尖頭器はほとんどないが、幾何学石器が狩猟具として用いられていた。この発表では、アゼルバイジャンで演者が2008年から2022年にかけて調査した遺跡出土資料にもとづき、幾何学石器を編年構築に用いる可能性について述べた。

扱う遺跡はダムジリ(Damjili)、ハッジ・エラムハンル・テペ(Hacı Elamxanlı Tepe)、ギョイテペ(Göytepe)である。全てアゼルバイジャン西部に位置する。ダムジリは前6500~6000年の中石器、前6000~5300年の新石器時代双方の堆積をもつ洞窟遺跡である。一方、ハッジ・エラムハンル・テペは前5950~5800年、ギョイテペは前5640~5450年に位置づけられる新石器時代集落である。これらのデータを総合すれば、居住形態の違いによる機能的変異を考慮しつつ、石器群の技術形態の変遷を追跡することができる。

3遺跡で出土した幾何学形細石器群を分析してみると、原石利用、石器形態、二次加工技術とも編年的变化を遂げていることが確認できた。最大の変化は「チョク」型、半月形型、台形型、三角形型など多様であった中石器時代の幾何学石器が、新石器時代にな

ると、ほぼ台形型に限定されるようになることである。

この変化は、三つの点で興味深い。第一は、幾何学細石器の型式は、南コーカサス中・新石器時代の編年構築に資すること。第二は、それらの変化は、この時期にすすんだ狩猟の衰退と軌を一にしている点。中石器時代における幾何学細石器形態の多様性は、当時、複雑な組み合わせ型狩猟具が用いられていたことを示唆しており、新石器時代にはそれらが放棄され単純化されたものと考えられる。そして、第三には、この変化は西アジアの肥沃な三日月地帯東翼で広く進行していた石器変化と一致していることである。イラン南部で、既に、ほぼ同時期に類似の事象があったことが報告されている。南北 1000 km を超える広大な地域で似たような石器技術変化が起きていたことは注目に値しよう。南コーカサスの新石器化は西アジア一帯の文化変化の枠組みの中で理解すべきことを示している。

イラン南西部ファールス地方新石器時代の 土器を再考する：タル・イ・ムシュキ、 タル・イ・ジャリ B 遺跡を中心に

三木 健裕

イラン南西部ファールス州、コル川流域では新石器時代が始まった紀元前 7 千年紀後半から 6 千年紀前半にかけて、土器文様の違いをもとにムシュキ期（およそ前 6400-6100 年）、ジャリ期（およそ前 6000-5500 年）という文化期が設定されている。文化、生業において両時期の違いは強調される傾向にある。

近年の研究史を整理すると、1) ムシュキ・ジャリ移行期における土器変化の詳細、および 2) ムシュキ期、ジャリ期の土器生産・消費の実態、この 2 点が課題であることがわかる。そこで本発表では、1) ムシュキ・ジャリ移行期に相当するタル・イ・ムシュキ (Tall-i Mushki) (以下ムシュキ) 遺跡 TMB ピット出土土器を定量分析するとともに、2) 残存状態の良いムシュキ期、ジャリ期の土器資料の三次元モデルを作成し、両時期における土器づくりにみられる違いをより詳細に探求した。これら二つの分析からムシュキ期、ジャリ期の土器を再考した。

今回はムシュキ遺跡、タル・イ・ジャリ B (Tall-i Jari B) (以下ジャリ B) 遺跡出土土器を対象とした。第一の分析では、東京大学総合研究博物館所蔵のムシュキ遺跡 TMB ピット出土土器 508 点を分析した。土器のウェア、主文様、副文様、製作技術といった属性を記載し分析を行った。その後遺跡内、遺跡間での時期変化を定量的に比較するため、ブレイナー・ロビンソン係数を算出した。第二の分析では、同館が所蔵する、残存状態の良いムシュキ、ジャリ B 遺跡出土土器 37 点を分析した。3D モデルを作成、観察し、製作・施文技法、文様単位割付を検討した。

第一の分析の結果、ムシュキ遺跡 TMB ピット内では、ウェア組成、主文様、副文様に明瞭な変化は認められなかった。対照的に、移行期にあたるトレ・バシ (Tol-e Bashi) 遺跡のバシ期 (IV 層、V 層) と TMB ピット出土土器を比較した結果、ウェア組成、副文様に類似性が認められる一方で、主文様には顕著な違いが確認された。放射性炭素年代の検討から、主文様は他の属性より変化のスピードが速いことがわかった。

第二の分析の結果、ムシュキ遺跡では土器個体間で製作・施文技法、主文様の割付に技能差がみられることがわかった。その一方でジャリ B 遺跡では、前者より単純な梯子状の主文様を数倍の回数にわたって割付けており、土器個体ごとの施文技能差は明瞭に認められなかった。こうした施文・割付法の差異が、土器づくりを実践し次代に伝えていくあり方の違いや、土器を取り巻く暮らしの違いを反映している可能性がある。ムシュキ・ジャリ期の土器から当時の村落社会にどれだけ迫れるのか、この点もさらに詳細な分析を通じて検討する必要がある。

イラク・クルディスタン、 シャイフ・マリフ遺跡 II 号丘の年代について

小高 敬寛・下釜 和也・三木 健裕・板橋 悠

イラク・クルディスタン地域シャフリゾール平原は、「肥沃な三日月地帯」の一角にありながら、河谷を介してメソポタミア低地へと通じる要衝であり、新石器化から都市化への移行過程を追跡するうえで絶好の立地といえる。ところが、その過程にあたる後期新石器時代の考古学的証拠は乏しく、特に前 6000~5600 年頃のそれは皆無に等しかった。シャイフ・マリフ (Shaikh Marif) 遺跡 II 号丘は、表面採集土器の分析からこの空白を埋める候補にあげられていた。その確認を目的の一つとして、2022 年に発掘調査を実施した。

発掘区からは 31 点の炭化物試料を年代測定用に採取したが、前処理後、測定に必要な炭素量が回収できたのは 17 点にとどまった。東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に依頼してこれらを測定した結果、校正年代 (以下同) は①前 6100~6000 年頃 (6 点)、②後 1020~1220 年頃 (5 点)、③後 1640~1920 年頃 (4 点)、④後 20 世紀後半 (2 点) の四つに集中した。

一方、文化層からの出土土器を分類すると、重量比で約 96%、口縁部片点数比で約 97% が、型式学的に後期新石器時代の所産と同定された。よって、現存する文化層は後期新石器時代の堆積に限られると推測され、①の年代がこれに整合する。文化層中の試料からは②~④の年代も示されたが、発掘時に見逃された攪

乱の影響と考えるのが妥当であろう。また、土坑以外の遺構がほぼ検出できなかったこと、試料の半数近くの年代測定に失敗したことを考慮すると、遺存状態が悪く、炭化物もあまり遺っていないため、測定試料が新しい時代の炭化物に偏ってしまった可能性がある。

なお、近隣に所在するシャカル・テペ (Shakar Tepe) 遺跡の後期新石器時代最上層 (2層) でも、シャイフ・マリフ遺跡 II 号丘の文化層に重なる年代が得られている。しかし、出土土器の組成は、後者が前者に後続する可能性を示唆する。シャカル・テペ遺跡では、4層でハッスーナ標準土器 (Hassuna Standard Wares) が登場し、続く3層から2層にかけてその比率を高めていく。ところが、シャイフ・マリフ遺跡 II 号丘では、シャカル・テペ遺跡2層よりもハッスーナ標準土器の比率が高い。よって、放射性炭素年代に差はないものの、物質文化の内容には前後関係が認められ、シャフリゾール平原における考古学的空白をわずかに埋めるものと評価できよう。

文化層の帰属年代は①と推定される一方、出土遺物には②や③の時代におけるヒトの活動を示す土器・陶器・土製品も含まれていた。しかし、堅牢な建築の痕跡は乏しく、簡易な構造物の残骸と思しき粘土塊のみである。中世中期やオスマン朝時代のシャイフ・マリフ遺跡 II 号丘は、現代と同様、耕作地や遊牧民の短期逗留地として使われたのかもしれない。

前期青銅器時代ユーフラテス河中流域における ステップと低地

—テル・ガーネム・アル・アリ遺跡近傍墓域群の 空間分析から—

田邊 幹太郎

前期青銅器時代のユーフラテス中流域における遊牧集団の社会体制を明らかにする考古学的な根拠は限られている。それは当時の人々が生業活動を行っていたステップ上に立地する遺跡と、その研究が乏しいことに起因している。テル・ガーネム・アル・アリ (Tell Ghanem al-Ali) 遺跡周辺では、ステップ上で大規模な墓地が発見されており、さらに踏査によって半径10 kmに及ぶ範囲で石器散布地が記録されているなど重要なデータが得られているが、統合的な空間分析はなされていない。本研究ではテル・ガーネム・アル・アリ遺跡周辺の調査で得られたデータをもとに地理情報システム (GIS) を用いて分析を行ない、当時の遊牧集団の動態を復元することを試みた。

まず、墓地データから墓地ごとの可視領域を推定し、次に標高データを元に算出した移動コストと石器散布地の分布から放牧ルートを推定した。墓地群が推定される放牧ルート上に立地し、加えてワディや東方

のステップからの視認性が高いことから、墓がステップにおける集団のテリトリーを表す装置として機能したことが示唆された。また、隣接するテル・ハマディーン (Tell Hamadin) 近傍墓地群との間は墓地の空白地帯となっており、双方の墓地群ともこの地帯からは視認できないことから、それぞれの墓地群を営んだ集団が、それぞれ近傍のステップを占有的に利用していたことが示された。

低地からステップ内陸部に至る墓地の連続的な分布が示しているように、ステップと低地の資源開発は一体不可分のものであったと思われる。季節的な生活サイクルを想定した場合、集落と周辺の牧草地を中心として伸び縮みする季節的な集団の変化を推測できる。墓地はそうした集団の紐帯を保ち、牧草地の利用を円滑にする機能を持っていたのかもしれない。

本研究を通して、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の調査で想定されていた、低地のテルとステップ上の墓地、牧草地という一まとまりの構造が、墓地の可視領域や移動コストの分析からも認められた。前期青銅器時代のユーフラテス中流域における墓地の空間分析についての研究はいまだに不十分であるが、今後の研究を通してガーネム・アリ近傍墓地群および、その周辺の社会の有様が明らかになることが期待される。

古代メソポタミアにおける分銅の標準値に関する予察 常木 麻衣

キュルテペ文書からは、紀元前2千年紀にアッシリア商人がキュルテペ (Kultepe) とアッシュール (Aššur) の間で、交易を盛んに行っていた様子を知ることができる。当時の売買では、モノの価格は銀の重さに換算されることが多く、度量衡の重さの単位は、六十進法が用いられていた。一番小さい単位である1シェは大麦一粒に、1シェケルは180粒の大麦の重さに換算された (Monroe 2005: 175)。しかし、実際に出土した分銅の質量を計測すると、同じ1シェケルでも地域・時代によって異なることがわかっている。この点について、N. Ialongo らは、分銅のレプリカを使った実験を行い、その結果、分銅の重さには誤差が見られることを明らかにしている (Ialongo et al. 2021)。その一方で、国内では、岩田重雄 (1982) が分銅の重さの標準化を試みているが、それ以降の研究は行われていない。そこで、この分銅の数値のバラツキを現在のグラムで換算しなおし、分銅の標準値について研究を深めることで、当時の交易の実態がより明らかになると考えた。本発表は、三次元コンピュータグラフィックス (3DCG) を作成し、計測することで正確な定量的データを入手することが可能となるため、大英博物館所蔵の分銅 (紀元前の西アジアの分銅に関する遺物は約240点) について、3DCG を作成

するための撮影方法について考察したものである。

分銅の3DCG作成のための撮影方法については、3Dスキャナーとフォトグラメトリの二つの方法について検討した。調査の結果、3Dスキャナーについては、基本的には、遺構のような大型の撮影に適していることがわかった。また、フォトグラメトリについては、小型の遺物である分銅の撮影が可能であるが、遺物の表面の光沢などにより撮影後の専用ソフトウェアでの編集時に点群データの作成が上手くいかない場合もあるため、撮影枚数や照明の当て方に工夫が必要であることがわかった。

これらの結果から、今夏の調査では、被写体を様々な角度から撮影し、その後デジタル画像を統合して3DCGを作成するフォトグラメトリを行うこととした。また撮影する遺物については、当時の分銅の中で特に多く出土しているヘマタイト製の遺物（円筒型、動物型）に限定して、実施することとした。

イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ遺跡出土の「アヒル」型分銅： アッシリア帝国の度量衡制度の一考察

西山 伸一

世界最古の「帝国」といわれるアッシリア帝国（新アッシリア）は、古代メソポタミア世界に君臨するにあたり、さまざまな支配システムを整備していった。その中の一つに度量衡制度がある。しかし、新アッシリア時代の度量衡制度については、楔形文字文書などを中心とした文献史学の分野でもまだ多くの不明点がある。考古学的な遺物についても分銅（青銅製や石製）は発見・報告されているが、どのように具体的に使用されたのかについてはまだ推測の域を出ないことが多い。さらに、帝国中央部で決定されたであろう度量衡制度がどのように帝国の各地に波及したのかは、物質文化の面からはいまだ不明な部分が多い。

本発表は、イラク・クルディスタン地域の新アッシリア時代（鉄器時代）の拠点都市、ヤシン・テペ（Yasin Tepe）遺跡より出土した石製のアヒル型分銅の報告と考察である。この発見は、新アッシリア時代の度量衡制度、特に帝国の地方都市における使用状況について重要な示唆を与えてくれる。何よりも、重要なのは、考古学コンテキストが明確であり、その使用状況についてもいくつかの提案ができることである。

出土した分銅は2点あり、どちらもドロマイト(?)と考えられる石製である。新アッシリア時代のアヒル型分銅に典型的なディテール（詳細）が彫り込まれておらず、側面に刻み目があるタイプである。どちらも「下の町」南東部で2016-2017年に検出したエリート層邸宅の北西部にある部屋の床面より発見された。大きい方（YS-S1）は9.8 kgあり、10本の刻み目があっ

た。小さい方（YS-S2）は6.2 kgあり、確実な刻み目は3本、不確定なものが2本以上ある。新アッシリア時代の質量単位は、heavy mina (1070 g) と伝統的なmina (1010 g) があった。誤差はあるが、大きい方は10 mina、小さい方は5または6 mina であると考えられる。近年のJ. Reade (2019) や Ascalone and Basello (2022) の研究からは、厳密に質量単位を分銅に適用しようとする傾向がうかがえるが、地方によって単位の誤差は大きかったのかもしれない。

ヤシン・テペの事例は考古学コンテキストが明確な事例として東部辺境で発見されたアヒル型分銅としては初めての事例になる。この地方拠点都市にも、アッシリアの度量衡制度のうち質量のシステムが適用されていたことが明らかになった。おそらく地方都市からの税や貢納の質量計測に使用されていたと考えられる。今後は、他の事例も研究しながら、新アッシリア時代の度量衡制度の一端を明らかにしてゆきたい。

境界域で発行される銀貨の特徴：

ヘレニズム・ローマ時代の出土資料を中心に

津村 眞輝子

3世紀にローマ属州が発行した銀貨について、諸勢力の争いの場となったユーフラテス川沿いから出土した資料をもとに検証した。対象資料は、古代オリエン特博物館シリア考古学調査団（团长：江上波夫）が1974~80年に北シリアのユーフラテス川中流域東岸（ミシオルフェ地域）の砦址から発見した一括出土銀貨（288枚）である。二つの壺の1壺分（115枚）が古代オリエン特博物館所蔵となっている。1979年概報でローマ銅貨と報告されたが、2007年に発表者が銅を多く含む銀貨であると修正した。今回、最近実施した成分分析などの新しい情報を加えて、あらためて属州銀貨の特徴を報告した。

内訳はローマ帝国カラカラ帝期（在位211-217年）からヘレンニウス・エトルスクス帝期（在位251年）までの銀貨である。ラテン語ラテン文字銘のデナリウス銀貨（約3g）ではなく、セレウコス朝時代よりシリアに根付いていたギリシア語ギリシア文字銘の4ドラクマ銀貨（10~12g）である。発行地は主にアンティオキアである。カラカラ帝期（211-217年）およびデキウス帝（249-251年）期発行の2点について、J-PARC、MSLの負ミュオンビームによる非破壊分析を実施し、表面から約1mmまでの銀の深さ方向濃度分布を測定した。カラカラ55%前後、デキウス40%前後という数値は、ローマ銀貨純度についての先行研究に近く、属州においても銀含有量を同様に下げていることが再確認できた。表層で銀濃度が高いというデータも得た。銀質低下に対する処置ともいえるが、錆等が起因する可能性もあり、今後の検討事項で

ある。

また、出土資料を再調査するなかで、概報で「ギリシア文字銘銅製碗」と報告された資料がローマの携帯用分銅であることが判明した。オーストリア、ハンガリーなどの西側の駐屯地等から出土している。シリア保管のため重量は未確認だが、ラテン文字銘と寸法から1/2リブラ（約163.7g）の公式の分銅と推定できる。

上記を含む出土資料および当時の政治状況に鑑みて、本遺跡はローマ側の砦であり、サーサーン朝ペルシアとの戦いで254年頃に破棄されたと推測している。一括出土銀貨はローマ兵士約2年分の俸給にも相当し、辺境地に駐屯する兵士への給料や軍資金の役割が考えられる。今後、俯瞰的な研究と比較資料を用いた銀貨の分析を進め、本国と属州間の銀の流れや制作技法の違いなどを検討していきたい。

アク・ベシム遺跡の二街区における 動物資源利用の差とその意味

植月 学・山内 和也・アマンバエバ バキット

アク・ベシム（Ak Beshim）遺跡にはソグド人が建設した西側街区（SH1=SH1）と唐が建設した東側街区（SH2・碎葉鎮=SH2）が存在する。これまでの分析でSH1（2018年以前調査）と、それに後続する年代のSH2（2019年調査）では動物資源利用のあり方が異なっていた可能性を指摘した。前者は都市的、消費者的資源利用の様相を示しているのに対し、後者は都市衰退後の小規模牧畜民村落における生産者的様相を反映すると解釈された（新井2016; 植月・新井2020）。

しかし、上記の差が年代差でなく、2街区の地区差である可能性も残されていた。そこで、本発表では新出資料を用いて、同時代における2街区の動物資源利用の差の有無を検討した。新出資料はSH1街路地区（AKB13）の大通り出土遺体群（2019年調査）、教会地区（AKB8）包含層出土遺体群（2022年調査）、およびSH2（AKB15）基壇周辺包含層出土遺体群（2022年調査）である。これら新出資料を用いることでSH1での都市衰退以降の様相が明らかとなった（AKB8）。逆に、SH2ではSH1が都市として機能していた時期に併行するより古段階の資料が得られた（AKB15、2022）。

種組成の通時的変化をみると、SH1街路地区（AKB13）の特徴として旧稿で指摘したウマの多さとイノシシ属（ブタを含む）の存在がより明確となった。この特徴は第1路面～第6路面にかけて大きな変化がないことも確かめられた。これに対して、SH1でもっとも新しい教会地区（AKB8）の教会廃絶後の生活面や包含層出土の遺体群では、上記特徴が薄れ、特にウマの減少が顕著であった。SH1の後半期には都市的な性格が薄れたといえる。この点はSH2最新

段階のピット群の様相とも共通している。一方で、新たに追加したSH2のより古い段階の包含層資料群（2022）でもウマが少なく、イノシシ属がほとんど見られない点は同様であった。つまり、おおむね9世紀を中心とするこの段階においては両街区において利用された動物に差があったことになる。SH2の当該時期は唐の碎葉鎮廃絶後に相当する。遺構に乏しいためこの時期の土地利用に関しては今後の調査に委ねる部分が大きいが、少なくとも動物資源利用の面において後代と大きな差が認められない。したがって、SH2では9世紀段階にすでに「生産者的・牧畜民的資源利用」がおこなわれており、同時期のSH1の「消費者的・都市的資源利用」とは明確な差が存在した。さらに、都市衰退後の11世紀には両街区ともに「生産者的・牧畜民的資源利用」に移行したとみられる。

ポスター発表

バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学
プロジェクト2023

安倍 雅史・山田 綾乃・長尾 琢磨
鈴木 崇司・岡崎 健治

ディルムンは、メソポタミアの文献史料に登場する周辺国の一つであり、前2千年紀前半にメソポタミアとインダス、オマーン半島を結ぶ海上交易を独占し繁栄した王国である。現在、バハレーンが、このディルムンに比定されている。ディルムンの栄華を象徴するのが、バハレーンに残されている古墳であり、バハレーンには、前2300年から前1700年にかけて7万5千基もの古墳が築造されている。

この古墳のなかで、とくに興味深いのが「子持ち古墳」と呼ばれる古墳である。「子持ち古墳」とは、古墳に小古墳が一つあるいは複数付随した古墳でのことである。

1970年代後半に、高速道路建設に先立ち、サール（Saar）古墳群の一部が緊急発掘された。この調査の際に、はじめて子持ち古墳が確認された。子持ち古墳の小古墳からは人骨は出土しなかったものの、小古墳の石室の大きさから小古墳には子供が埋葬されており、子持ち古墳は、主要古墳に親、小古墳に子供を埋葬した家族墓であろうと推定された。

1980年代になると、新興住宅地の建設に伴いハマド・タウン（Hamad Town）古墳群が緊急発掘されたが、この調査の際に子持ち古墳の小古墳から子供の人骨が初めて検出され、子持ち古墳の小古墳に子供が埋葬されていることが証明された。

その後、子持ち古墳の発掘件数も増加し、B. フローリッヒ（Frohlich）らが、子持ち古墳に関して総

合的な研究を実施している (Frohlich and Ortner 2000)。彼らの研究は、単独古墳あるいは子持ち古墳の主要古墳には 16 歳以上の成人が埋葬されており、子持ち古墳の小古墳には、新生児から 15 歳までの子供が埋葬されたことを明らかにした。しかし、一般的にディルムンの人骨は残存状態が悪く、「主要古墳に埋葬されたのは、父親だったのか、あるいは母親だったのか？」など、基本的な疑問さえ明らかにされていない。

筆者らは、2015 年からディルムンの古墳群の一つであるワーディー・アッ=サイル (Wadi as-Sail) 古墳群で発掘調査を実施しているが、2020 年からは、とくにこの子持ち古墳に集中して発掘を行っている。

本発表では、2023 年 1 月、2 月に実施した第 7 次調査の発掘調査成果を発表した。私たちの発掘調査によって、子持ち古墳は、従来、考えられていたよりもはるかに複雑なものであることが判明しつつある。

バハレーン国水中文化遺産調査の可能性

佐々木 蘭貞

バハレーンはユネスコ水中文化遺産保護条約を批准しているが、本格的な水中遺跡の調査はほとんど実施されていない。バハレーン文化古物局は、東京文化財研究所の安倍雅史氏に水中文化遺産の確認調査を依頼し、その要請を受けて筆者が 2021 年と 2023 年に水中遺跡の調査を実施した。

このプロジェクトは、バハレーン周辺にどのような水中遺跡が存在しているのか、そのポテンシャルを探ることに主眼を置いた。最初に、①海難の記録、海図に記載された沈没船の位置、海底障害物、漁礁の情報、②漁師へのインタビューを通して引き上げ遺物や海底にある不自然なモノの情報、海にまつわる伝承など、③政府や研究者がまとめている沈没船・湧泉の位置情報などを調べた。

その結果、漁礁・不自然な地形 90 点、沈没船 85 点、湧泉 35 点を特定し、QGIS により管理している。これらの地点のうち、遺跡発見の可能性の高いポイント 22 地点で潜水・シュノーケリング探査、またソナー探査を実施した。

今回探査した主な地点を以下に示す。①アル・ジャレムはバハレーン本島の北約 20 km に位置する約 100 km² の浅瀬地帯で、漁師によると過去には人が住んでいたと伝わる。水を汲むために訪れたとされる泉の周りからイスラム期の壺のかけら等が発見されたが、住居跡などは発見できなかった。②コール・ファシュトは本島の北約 12 km に位置する浅瀬で、海の中に井戸が設置されている。この井戸の周りから、アル・ジャレムの井戸と同様にイスラム期の土器片を確認した。③ナビ・サレーモスクは、バハレーン島の東

側に位置するモスクで、周辺で岩礁ピットなど船着き場として加工した可能性のある痕跡を発見した。また、これらの地点の他、20 世紀初頭の沈没船を数隻確認した。

このプロジェクトでは、水中遺跡だけでなく、伝統的な木造船の建造方法や航海技術、海事文化にも焦点を当てた。木造船の造船所を訪れ、船大工へのインタビューを実施した。船大工に話を聞くと、建造方法は数世紀変わっていないと言うが、外板の接合には鉄釘を使用しており、湾岸諸国特有の伝統的な縫合船ではない。造船技術の変遷なども今後は調査を進めたい。

バハレーン周辺は砂の堆積が多く水中遺跡の多くは完全に埋もれている可能性が高く、見つけにくい状態にあるが、今回の調査でいくつか水中遺跡発見の手掛かりと調査手法を検証することができた。今後も調査を続け、バハレーン島の海事文化の解明に貢献していきたい。

バハレーンにおけるイスラーム墓碑の 3 次元計測調査

長尾 琢磨・山田 綾乃・安倍 雅史

バハレーンではディルムン時代の膨大な数の古墳群が知られており、続くティロス時代にも古墳は引き続き築造された。イスラーム時代には古墳は築造されなくなり、11 世紀頃からアラビア語が刻まれた墓碑が墓の目印として利用されるようになる。しかし、それ以前に最後に確認されている墓碑は、2~3 世紀のものと同定されるティロス時代の人物装飾が施された墓碑であり、墓碑を利用する習慣には約 7 世紀のギャップがあることになる。

イスラーム時代前後のバハレーンにおける埋葬には未だ不明瞭な点が多く、当初、バハレーンにどれくらいのイスラーム墓碑が存在するのかということさえ明らかになっていなかった。近年、T. インソールら (Insoll) の悉皆的な分布調査によって、墓碑のリスト化が進められ、約 150 基のイスラーム墓碑が残されていることが明らかになった。このリストを用いて、バハレーン文化古物局により墓碑の保護が進められているが、石灰岩で作られた墓碑は塩害などにより劣化が進行していた。

このような状況を踏まえて、バハレーン国立博物館の S. アル・マハリ (Salman Al Mahari) 館長から東京文化財研究所へと、イスラーム墓碑の保護への協力要請があり、2023 年 2 月に筆者らはバハレーン国立博物館とアル・ハミース・モスク所蔵の墓碑の三次元計測調査を行った。本発表では、三次元計測を行った 36 基の墓碑について概説し、そのうち 4 基について、三次元計測に基づくオルソ画像を提示しながら諸特徴と経年劣化の状況について明らかにした。

結果として、被葬者の名前や埋葬された日付などの

碑文を有する墓碑が多数確認されたが、碑文は経年劣化によってかなりの損傷を受けており、碑文が判読できない墓碑も多くみられた。山型・玉型の装飾を両端に持つ墓碑もいくつか確認されたが、一部破損や全損している墓碑が大半であった。一方で、石灰岩製の墓碑の記録に際して、三次元計測が極めて有効であり、写真よりも碑文の視認性がより向上することが確認できた。三次元計測は現在の墓碑の状態をそのまま記録することが可能であり、復元や経年劣化の進行状況の把握など、イスラーム墓碑の保護へとより寄与できると考えられる。今後は他遺跡の墓碑についても調査を進めていく予定である。

後藤健氏旧蔵、西アジア文化遺産写真のデジタル・アーカイブ化

山田 綾乃・高橋 奈緒・柴田 みな
長尾 琢磨・安倍 雅史

東京文化財研究所は、2021年8月に故・後藤健氏が所蔵していた西アジア地域の文化遺産や発掘調査の様子を撮影した写真資料一式をご遺族より譲り受けた。寄贈された写真資料には、1980-90年代の西アジア地域、湾岸諸国の遺跡、博物館、港などが記録されており、当時の文化遺産の様相を伝える貴重な情報源となりうるものであった。そこで東京文化財研究所文化遺産国際協力センターでは、スライド、紙焼き、ネガなど異なる形式で遺された後藤氏旧蔵の写真資料を、デジタル・アーカイブ化するプロジェクトを立ち上げた。

最も古い写真資料は、後藤氏が1986年1月に実施した湾岸諸国周遊調査の旅に出た際の記録で、本アーカイブの大部分を構成している。また、立教大学の小西正捷と共に組織した日本湾岸考古学調査隊の調査候補地を選定するため、再び湾岸諸国とパキスタンを訪れた際の記録も含まれる。1991~96年まで、バハレーンで5期にわたって実施された神殿遺跡アイン・ウム・エッ=スジュール (Ain Umm es-Sujur) の発掘調査に関しては、調査経緯を収めたスライドとネガが残されていただけでなく、紙焼きしシーズン別にアルバムに整理されていた。

その他には、東京国立博物館学芸部東洋課の西アジア・エジプト室長の在職時に後藤氏が担当した「四大文明展」のエジプトに関する視察や準備のための資料だったのではないかと推察される資料群が認められる。さらに、現在は立ち入ることの難しいリビアの写真資料が充実している点も後藤コレクションの特徴である。1991年当時のリビア各地の遺跡や博物館、港、そして人々の様子が収められており、考古学研究者のみならず当該地域に関心のある者にとって有益となるに違いない。

晩年の後藤氏は、2014年にバハレーンでワーディー・アッ=サイル (Wadi as-Sail) 考古学プロジェクトを立ち上げ、ディルムンの最初期の古墳群を発掘調査し、2020年1月に逝去するまで精力的に研究活動を続けられた。ただし、写真資料はデジタルデータに切り替えられたようで、ネガ、紙焼き、スライドとしては残されていない。

アーカイブ化した資料は今後、オンライン・データベースへの登録など、研究者や一般の人が閲覧可能な状況に整える計画である。さらには、バハレーン考古学調査史の重要な記録として、バハレーン国立博物館が運営するアーカイブへの共有も検討し、後藤氏の湾岸考古学への貢献を後世に遺るものとしていきたい。

オマーン・タヌーフ峡谷の中期青銅器時代集葬墓：型式と構築背景の検討

黒沼 太一・三木 健裕・田邊 幹太郎・近藤 康久

南東アラビアの中期青銅器時代 (前2000-1600年) には、様々な形態の集葬墓が西部地域で造営された一方で、東部地域では集葬墓の発見例が少ない。この背景には生業・生活サイクル・水資源の利用可能性の違いがあり、特に4.2kaイベント以降の乾燥化の影響が大きかった東部では、水資源が比較的豊富で、少なくとも季節的な定住が可能な一部のオアシスに集葬墓が築造された可能性が高いと考えられていた。

ところが、2022年に発表者らは東部地域にあたるオマーン・ハジャル山脈南麓のワーディー・タヌーフ (Wadi Tanūf) 峡谷第7遺跡 (WTN07) の踏査で新たに集葬墓 (第122号墓) を発見した。この墓は類例のない構造を有し、オアシスなどへの立地を特徴とする集葬墓の通例からも逸脱するため、中期青銅器時代の墓制を再考しうる重要性を有する。本発表では、WTN07遺跡第122号墓の構造的特徴を概観し、類例と比較検討した。さらに立地条件や周辺遺跡との関連を踏まえ、峡谷に集葬墓が構築された背景を議論した。

WTN07遺跡はタヌーフ峡谷段丘テラスにあり、イスラーム期墓123基、青銅器~鉄器時代建築物8基、中期青銅器時代集葬墓1基からなる。テラスの西側から中央に大部分の遺構が分布するが、第122号墓はやや離れた場所に位置する。

第122号墓は、不整形な円形主体部 (直径2.5-2.8m) の周りに複数の付属部を有する。主体部の外壁は直径30-50cmほどの円礫、頂部は直径10-15cm以下の小礫により構築され、中央に南西-北東方向を主軸とするU字形の主墓室を持つ。主体部北東部には長1.9m、幅1.2mほどの羨道と見られる張り出しがあり、主体部南西部から南東部には幅1.8mほどの副墓室が張り付く。さらに主体部北西部には付属墓と見ら

れる構造物が2-3基ある。

これらの構造的な特徴を比較した結果、円形主体部・U字形墓室・付属墓を持つ墓は東部地域のジャバル・サルート (Jabal Salūt) 遺跡に、主体部に張り付く副墓室を持つ墓は西部地域のナズラ (Naslah) 遺跡などに、北東部分に羨道を有する墓は同じく西部地域のジャバル・アル＝ブハイス (Jabal al-Buhais) 遺跡などに事例を見つけた。この検討から、WTN07 遺跡第 122 号墓は既知の集葬墓の構造要素を折衷的に持つと推定できた。この時期には多様な形態の集葬墓

が構築されるが、その背景には所与の構造要素の取捨選択があり、本墓からはその様相が垣間見える。

一方で本墓が峡谷に位置する背景には、谷間を通じた山越え移動との関連が考えられる。タヌーフ峡谷では洞穴遺跡での逗留痕跡や構築するための労力が比較的小さいと見られる一次葬墓群など、中期青銅器時代の活動が多く確認できている。本墓の発見により、集葬墓の構築背景として、移動性も考慮する必要が出てきた。